

---

# 月を見上げて

はしもと なおや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月を見上げて

### 【Nコード】

N8809V

### 【作者名】

はしもと なおや

### 【あらすじ】

満月を見ると高校生のころを思い出す。当時の恋人との会話。恋人の友達は、月のネックレスがよく似合っていたそうだ。

今日は、月がきれいだ。コンパスで書いたように丸い。月の見え方というのは、年齢とか気持ちによって全く異なってくる。例えば、満月だって、ときにはそれが世界のすべてのように思えるけど、その満月が世界から何かを奪っているかもしれないと不安になることもある。ただ、そういう見え方の違いというのは、自分のなかの問題だ。月は僕を鏡のように映してくれる。だから、自分がわからなくなってしまうときには月を見る。それが、僕が僕であるための手段になるのだ。

こんなに丸い月を見てみると、昔のことを思い出してしまう。あれは、たしか高校二年生の夏だ。もう五年も経ってしまった。そんな時間も月にとっては大した問題ではないのだろうな。その五年間で僕は、こんなに変わるのに。

僕には泉という恋人がいた。海岸で行われた花火大会のあとに、なんとなく寂しくなってしまう二人で防波堤に座っていた。泉は水色の浴衣を着ていた。何気ない会話のなかで、月の話になった。その日も満月で、その光が波に気だるそうに波に揺れていた。なんだか僕の方まで揺れているような感じだった。

「満月を見ると、ある女の子を思い出すの。近所の幼馴染で同じ年高校が違うからいつも会ってわけじゃないんだけど。久しぶりに会ったときに、かわいいネックレスを付けてきたの。月のネックレス。その子、そういうタイプじゃないからびっくりした。男勝りで陸上部に入ってたハードルとかやってたのかな。もちろん、髪もショートカット。けど、そのネックレスがうらやましいくらい似合ってた。チェーンの真ん中に薄いガラスでできた満月がぶら下がっているだけのもの。そんな高くはなさそうなんだけど、すごく大事そうにしてた。」

「それで、聞いてみたの。それ、彼氏にもらったの？ お互い隠し事はなしだつて言つたでしょつて。でも、何も言わなかった。いつもだったら、笑つて話すはずなんだけどね。でも、サバサバしているタイプだからしつこく聞けば白状すると思つてしつこく問い詰めてみたの。でも、私、すごくひどいことしてた」

月が一瞬雲に隠れて海が暗くなる。泉は唇をかみしめ、目をつぶつた。

「死んだんだつて。中学校のところに付き合つていた男の子。同じ中学だから付き合つてたことは知つてたんだけど、たしか転校したのよ。三年生になる前に。何で死んだかは、聞かなかつたわ。涙がボロボロこぼれて。あいつちを打つことだけで精いっぱい。でも、その子一度話したら、洪水のように何から何まで話してきて、聞く方もきつかった。なんていうか、痛々しいの。死んだひとを生きているように話すことが。死体解剖をしているみたいで。そう、とか、うん、とかしか言えなくて。」

「それで、ネックレスはその男の子からのものらしいの。でも、付き合っている時じゃなくて死んでから。机の引き出しのなかの彼女の住所を書いた封筒に入っていたんだつて。手紙もあつたみたい。なんて書いてあつたと思う？ 《誕生日おめでとう！ 十五歳も幸せな一年にしような。ずっといっしょだぞ》気恥ずかしくて渡せなかつたのよ。中学生つてやっぱりそういうところあるでしょ。でも、結局、長くは続かなかつたつて聞いたわ。でもね、悪い言い方だけどその男の子がしんだから想いが伝わつたつていうか……」

死んだら全て終わりだよ、と僕は言つた。

うん、と泉は下を向き、泣いた。とても静かな泣き方だった。そして、赤い巾着からネックレスを取り出した。月がガラスの月を照らすのを見ると、なんだか宇宙を漂っているみたいだった。

「その子も、後を追うように死んじゃつたの。自殺とかじゃなくて、普通の事故。道を渡ろうとしたら、トラックがいきなり曲がつてきたつて。このネックレスの話を聞いた一週間後くらいだった。まだ

死んでから一カ月経っていないわ。まだ実感がわかなくて、まだどこかにいるんじゃないかって思うけど。これ、お葬式のとくに取っ  
てきちゃったんだ。どうしても、そうしなきゃいけないと思った。  
でも、ここでさよなら」

そう言くと泉は立ち上がり、海岸までゆっくりと歩いていき満月に  
向かってネッケレスを投げた。一瞬、二つの月が重なった。それを見  
ながら、僕は泉のことだけを考えていた。

あのネッケレスは今、どうしているのだろうか。暗い海の底から  
見える本物の月に憧れているんだろうか。もしかしたらその方がよ  
いのもしれない。

泉とは、もう恋人の関係ではなくなってしまった。でも、今も友  
達として仲良くしている。もうお互いよりを戻すということはない  
だろうけど、一生続く関係になると思う。そうなればいい。

今夜の月は、他の人にはどんな風に見えているだろう。僕は、な  
んとなく涙を流したくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8809v/>

---

月を見上げて

2011年10月8日18時07分発行